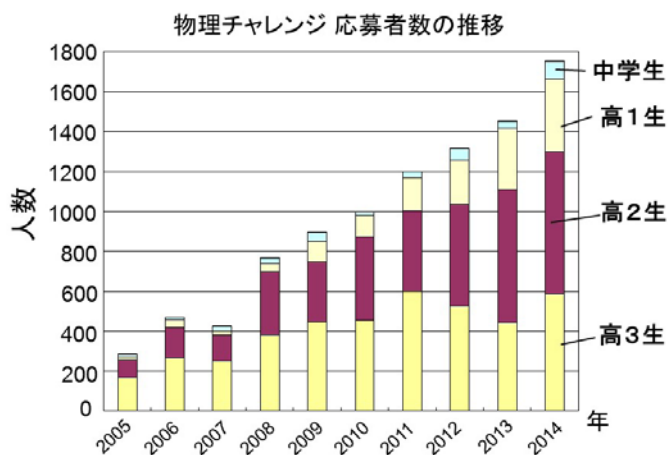


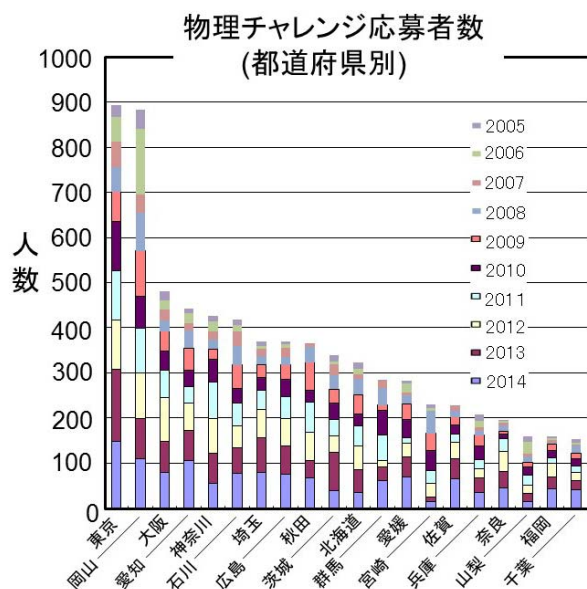
物理チャレンジ 2014 第1チャレンジ 開催される

応募者数、過去最高を更新

物理チャレンジは今年で 10 回目を迎えました。物理チャレンジ 2014 の参加者募集は 4 月 1 日から 5 月 31 日の期間で行われ、応募者数は 1762 名と昨年に続き過去最高を更新しました。下図のように応募者数は年々増加しています。今年は、これまでの直線的な増加から予想される数よりも多くの応募者がありました。高校のどの学年の生徒の参加も増加していますが、高校 3 年生と高校 1 年生の増加が顕著です。これは、学校で物理を選択する生徒が増えたことと、募集の締め切りが昨年より 1 か月ほど伸びたことに拠るのではと考えております。また多くの中学生が参加したことも大変にうれしく思います。



都道府県別にみると、下図のように 10 年間の総数では東京と物理チャレンジ「発祥の地」である岡山県が飛び抜けています。また 10 年目にして応募の空白県はなくなりました。将来的には、各地域から東京や岡山を凌ぐほどの応募者が出ることを期待します。



第1チャレンジ部会

電気通信大学 鈴木 勝



理論問題コンテストと実験課題レポート

応募者には理論問題コンテストと実験課題レポートの両方が課されます。実験課題レポートの締め切りは 6 月 20 日（消印有効）で、1489 通のレポートが提出されました。実験レポートは最高の SS から最低の DD までの 9 段階で評価されます。理論問題コンテストは 7 月 13 日の日曜日 13:30~15:00 に、全国 80 か所の会場で一斉に行われ、総数で 1554 名が参加しました。理論コンテストは 100 点満点で採点されます。理論と実験の両方に挑んだ応募者は 1425 名でした。

理論問題と実験課題の総合成績によって、8 月 19 日から岡山大学と少年教育センター関谷学校で開催される全国大会 第 2 チャレンジに進出する 104 名が選抜されました。今年度の理論問題は少々難しかったようで、平均点が昨年より少し下がりました。下図は理論問題と実験課題レポートの成績分布図です。実験課題で高い評価を得た応募者は理論問題も得点が高い傾向があります。しかし残念ながら、理論問題はそれほど得意でない応募者もありました。また、理論問題では優れた成績でも実験課題は高い評価がもらえなかった応募者もあります。第 2 チャレンジへの選抜は総合成績によって行いますので、第 1 チャレンジでも理論問題と実験課題の双方とも頑張ってください。理論問題と実験課題のそれぞれの成績分布や詳しい講評は次頁以降の記事を参照してください。

物理学は実験と理論の 2 つが手をたずさえて進歩してきました。実験を通して物理を楽しむことも、第 1 チャレンジの役割の一つです。皆さんがチャレンジした実験は、他の人が知らないことを見せてくれるかもしれません。身の回りの物事を対象にして実験し、それを理論的に考えることで物理の理解が進むでしょう。そうして、ますます物理が楽しくなると思います。第 1 チャレンジに挑戦することによって、より多くの皆さんが実力を伸ばすことを期待します。

